

②

引き出しをいっぱいつくろう

吉楽洋平さん

吉楽洋平さんは、ワークショップの受講者の中で唯一、プロのカメラマンとして活動している方です。

—まずは〈決定的瞬間〉の課題から。決定的瞬間は「偶然を狙うタイプ」と、何かが起こるまで待って撮る「待ち伏せタイプ」に分かれるけれど、吉楽くんは「待ち伏せタイプ」だったね。



—それで、次に〈ニューカラー〉の課題。



—今あらためてこのシリーズを見ると前よりよく見えるね。竜巻の後にその現場に行ったんだっただよね。

吉楽 この時は6日後に行ったんですけど、ちょっと遅すぎじゃない？と言われてました。

—群馬だっけ？

吉楽 群馬県館林市で、2009年でした。

—そもそも、このワークショップはカメラマンとか、写真をやっている人は採らない方針だったんだけど。受講してみて最初にどう思った？まわりは写真に慣れていない人ばかりだったと思うんだけど。

吉楽 でもボクも、もう1回、一からやろうと思っていたので。

—これまでの経験に対してのプライドみたいなものはなかったの？

吉楽 なかったですね。

—これは？



吉楽 〈ポストモダン〉の課題で、虫目線で撮った写真を虫眼鏡で見る、というものです。

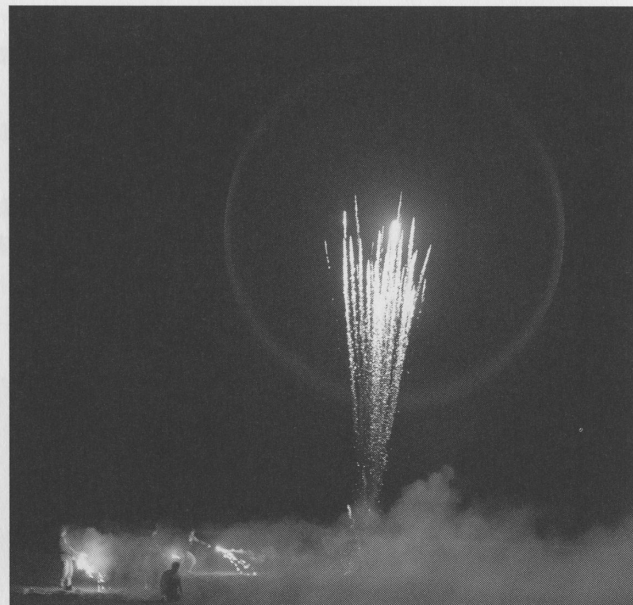
—これは最近の鳥のシリーズ (P.167) に近いね。

吉楽 つながっていますね。

—1期はこれで終わったんだっただね。それでもう一回、一からやってみてどう思った？

吉楽 やってみると難しかったですね。〈ニューカラー〉はわりとすんなりできたんですが、〈決定的瞬間〉は難しかった……いや本当にやってみないとわからないなって思いました。

カラー口絵 P.106



—この作品はワークショップとは関係なく、自分の仕事で撮っているときに偶然、これ、いいんじゃない？って閃いたんだっただよね。

吉楽 そうですね。ほかの夜景も撮っていたんですが、ホンマさんに花火だけでいいんじゃない？って言われて。

—もともとはどういう仕事の依頼だったの？

吉楽 空をいっぱい撮ってほしいって言われて、それで江の島の灯台から撮ることになったんです。ただずっと晴れていて全然雲がなかったから、日が落ちるまで待つ。たまたま江の島の花火大会の日で、浜辺に人がいっぱいいる光景を撮ったんです。

—これはデジカメじゃないと撮れない画像だよな。

吉楽 「写真新世紀」の審査会でもほかの作品はよくないけど、これだけはよかったって写真評論家の清水穰さんに言われました。

—それで佳作に入選したと。その時、佐内（正史）くんにはなんて言われたの？

吉楽 「花火いいんだよねー、ただお前の写真には帰る家があるから」って。

—（爆笑）それでその後から今までは、キュビズムみたいなことに挑戦したりユニット組んだりしていたんだよね。

吉楽 何かファウンドフォト的なことをやりたかったんです。それで題材やテーマを探す中でこの鳥の本を見つけて、鳥のシリーズが実現しました。



—このワークショップはほかと比べてどういうところが違うというか、特色があると思った？

吉楽 実はほかのワークショップに参加したことはないんですけど、大学と比べると、大学の授業ってもっと課題が抽象的なんですよね。「石と木」を撮ってこいとか。ホンマさんのワークショップのように、ちゃんとお手本となる作品があって、それを真似して撮るというのはその作家の作品や構造や癖を知るのにもいいし、自分の練習としてもよかったです。

—それは先人たちがやってきたことを新たに推し進めるということだからね。

吉楽 大学では、何か最初からオリジナルを追求させられるというか。—今後の展望は？

吉楽 社会性のある作品かな。

—じゃあ竜巻とかの方向で？

吉楽 そうですね、こっちに戻ります。本当にやりたいのは社会派の作品をエド・ルシェミみたいなアプローチでやることなんですけれど。でもロマンチック系にも要望があるので、この路線も大事にしつつ。

—キャンソ：写真新世紀2012年度（第35回）公募優秀賞受賞

